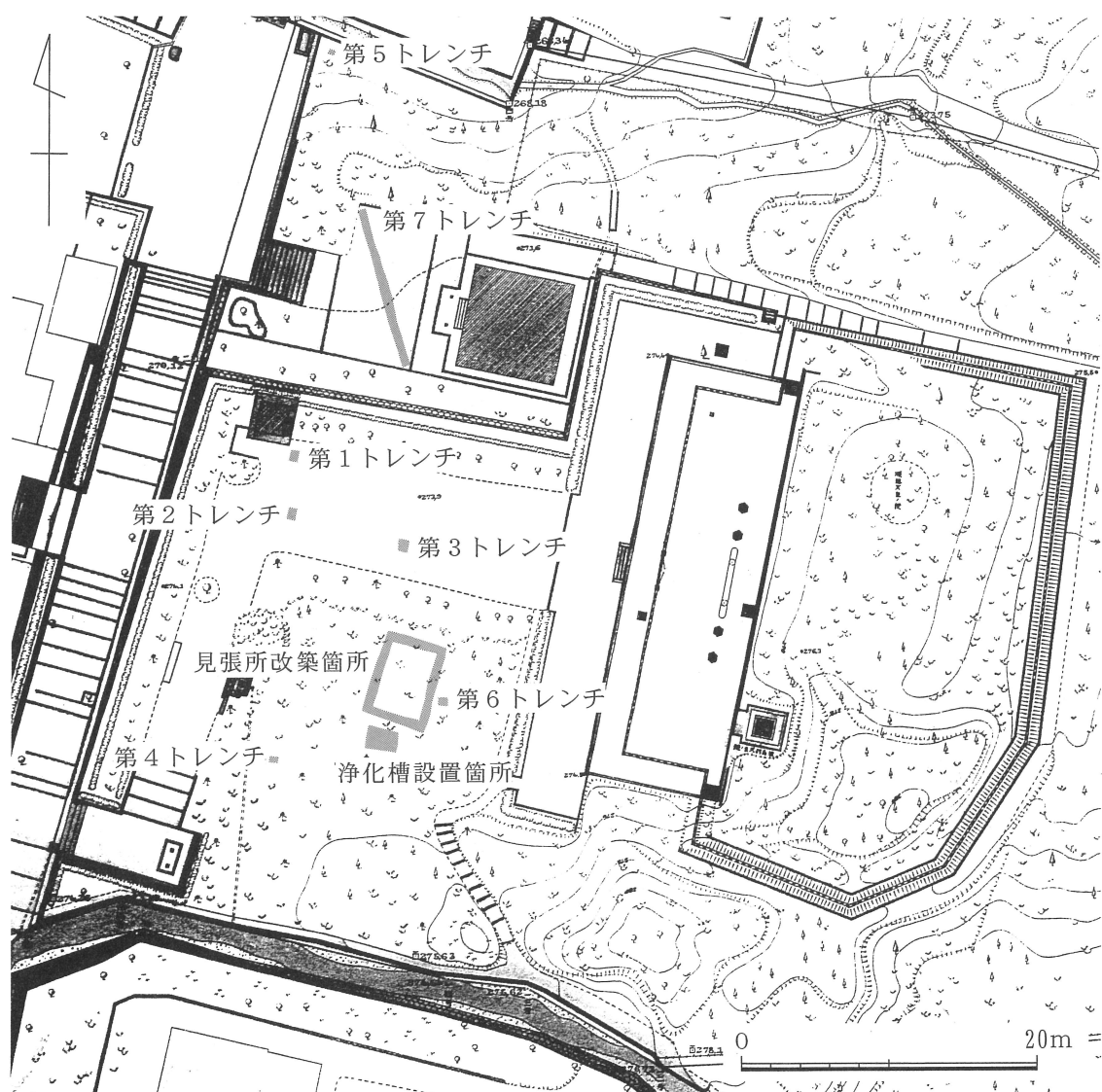


後鳥羽天皇順徳天皇 大原陵見張所改築工事に伴う立会調査

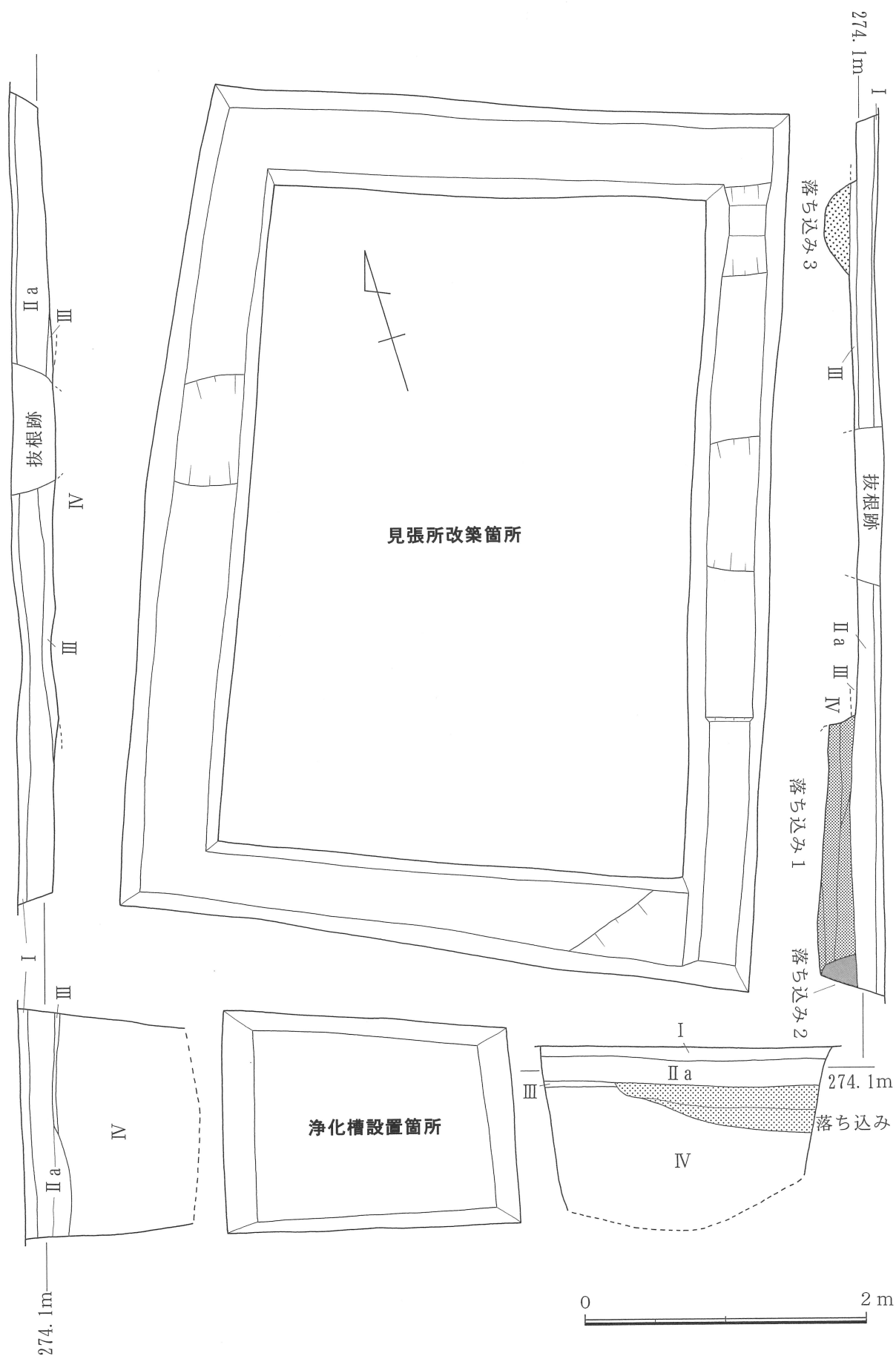
後鳥羽天皇と順徳天皇の陵である大原陵は京都市左京区大原勝林院町に所在する。比叡山の西麓に位置し、著名な古刹である三千院の北隣にあたる。後鳥羽天皇陵は石造の十三重塔で、順徳天皇陵は円丘である。

今回の調査は一般拝所内に所在した見張所が経年のため老朽化し、改築されることになったためおこなったもので、平成17年7月11日～14日の間、見張所改築箇所、浄化槽設置箇所⁽¹⁾、電気・排水関係埋設箇所などの9箇所について本部職員が立ち会い、その他工事期間中は監区職員が随時立ち会った。以下では内容が重複するため、見張所改築箇所(長さ6.0m×幅4.5m×深さ0.2m)、浄化槽設置箇所(長さ2.1m×幅1.6m×深さ2.2m)、第5トレンチ(長さ0.4m×幅0.4m×深さ0.4m)の3箇所について報告する。

見張所改築箇所ではまず20cmほどの掘削をおこなった。その結果、厚さ10cm弱の表土層(I層)を除去すると、現在の拝所造成時の客土と考えられる暗茶灰色砂質土層(IIa層)が確認でき、その下層には註1でふれた実光院所在時の旧表土層と考えられる暗褐色砂質土層(III層)が確認できた。また、III層の下層では地山と判断される直径3cmほどの礫を多く含む明黄褐色砂質土層(IV層)が確認できた。見張所改築にともなう掘削深度はほぼIII層までにとどまるため、工事は問題なく施工できるものと判断したが、III層を切り込む落ち込み(落ち込み1)、この落ち込み1を切り込む落ち込み(落ち込み2)とIV層を切り込む落ち込み(落ち込み3)

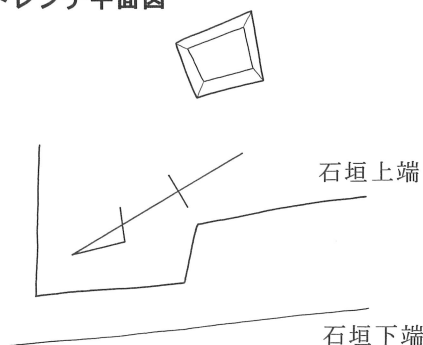


第41図 大原陵 調査箇所位置図 (1/500)

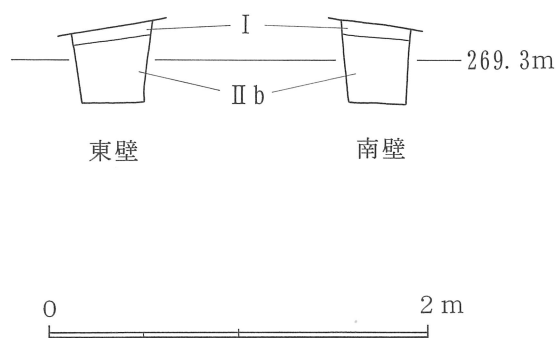


第42図 大原陵 調査箇所平面図および断面図（1）（1/40）

第5トレンチ平面図



第5トレンチ断面図



第43図 大原陵 調査箇所平面図および断面図(2)(1/40)

がそれぞれ検出されたので、念のため時間の許す範囲内で調査した。どちらの落ち込みもそれほど深いものではなく、その性格を判断するような手がかりをえることはできなかったが、落ち込み2で土師器片2点、磁器片1点が、落ち込み3で土師器片1点、磁器片1点が出土した。いずれの遺物も細片であり図化しえないものであったが、幕末から明治頃のものと判断される。

なお、第1～4トレンチも似たような状況であった。

浄化槽設置箇所は見張所改築箇所の南側に隣接する位置で、掘削深度は2.2mにおよんだ。基本的な層序は隣の見張所改築箇所と変わりがなく、地表面から30cmほど下で地山と考えられる明黄褐色砂質土層(Ⅳ層)が確認できた。Ⅳ層は下位になるほど含まれる花崗岩の径が大きくなり、大きいもので直径1m近いものも存在した。また、Ⅳ層は掘削するとほどなく急激に水が湧いてくる状態であり、それよりも下の状況を記録化することは困難な状況であった。なお、北壁では見張所改築箇所検出した落ち込み1・2の続きと思われる遺構を断面で確認した。

5トレンチおよび7トレンチは他の調査箇所とは石垣を隔てて5mほど低い位置にあり、これまで述べてきたものとは異なる状況である。ただし、5トレンチと7トレンチについては似たような状況であったので、ここでは5トレンチについてふれることとする。

5トレンチは今回の調査でもっとも北側で標高の低い位置に設定されたトレンチである。掘削深度は40cmで、厚さ5cmほどの表土とその下に非常にしまりのない明茶灰色砂質土層(Ⅱb層)を確認した。このⅡb層は色調から判断して地山に由来する客土と思われる。なお、5トレンチ、7トレンチともに遺物、遺構は確認されなかった。

以上の結果をふまえ、工事は予定通り施工された。

(加藤一郎)

註

- (1) 上野竹次郎の記述(「後鳥羽院天皇大原陵」『山陵』1924年、『山陵(新訂版)』として名著出版より1989年に復刻)によれば、今回の工事箇所である見張所改築箇所および浄化槽設置箇所付近は、現在本陵と道をはさんで西側に所在する勝林院の塔頭である実光院が明治20年まで存在していたと推測される場所であることから、さまざまな状況を想定しつつ慎重に調査にあたった。